

保育の現場から

かしわもちやさん

吉岡 晶子

入園して一か月余りが過ぎたゴールデンウィーク明けのある日、二人の男児がかしわもち作りを廊下で始めた。あれよあれよという間に何人もの子どもたちが入れ替わりやってきて、にぎにぎしい大繁盛の「かしわもちやさん」になった。

私も楽しくなって「いらっしやい、いらっしやい」など声をかけながらお店の一員となって大忙し。終わったときにはみんな「フーッ！ やったね」と顔を見合わせ、大売出しの後の満足感を味わった。

本園の年中児は、年中になってからの新入児と

年少からの進級児（クラス替えてメンバーは入れ替わっている）で構成されている。それぞれの履歴があり、戸惑いや不安もそれぞれ抱えていた。

また年中のこのころは、幼稚園の様子が少しわかり始め、そのような子どもたちもそろそろ緊張感がはぐれ、張り切って楽しそうに遊ぶ姿も見られるようになる。半面、幼稚園に入ったうれしさが一息つき、われに返ったかのように気持ちが揺れて不安になったり、連休を家庭でゆっくり過ごしたことで里心がついたりする様子も見られ、それぞれの思いがごちゃごちゃに入り混じっている時

期でもある。

そのようなときに、いろいろな子どもたちがそれぞれ
の思いでかわって、「フーツ！」の気持ちを感
じられたことは、私にとってもうれしいこ
とだった。

事の始まり

A夫とB夫が、保育室のままごとコーナーから
テーブルやいす、ままごと道具をせつせと廊下
運び出していた。この二人が廊下に自分たちの場
所をつくろうとしたのは初めてであった。そのこ
とに私は驚きうれしかった。この場がそのまま落
ち着いて遊べる場になるといいなと思い、「ゴザ
も敷こうね」とゴザを出してきて広げた。

A夫は新入児。実は、A夫のこれまでの様子に
は気になることがあった。友達がままごとで遊ん
でいるのをそばで見えていたかと思うと、そのうち

に使っている机をひっくり返したり、茶碗やごち
そうをぐちゃぐちゃにしたり、積み木で構成した
ものを崩すなど、誰かが遊んだところに手を掛け
ることがたびたびあった。私は「壊れちゃうよ」
「○○ちゃんが作ったものだから大事にしよう
ね」など注意や止める言葉をかけながら後始末を
する、といったかわりになりがちだった。A夫
が何をしたいのか、何をしているか、わかりにく
く、気持ちの表し方に不器用さを感じていた。

B夫は進級児。進級してクラスのメンバ―も担
任も新しくなった。一人でいることが多く、登園
すると保育室の隅っこに積み木を並べ、囲い
を作った中に入ったり、電車遊びをしては独り言を
言ったりしていた。

そのような二人が一緒に道具を運んで並べ始め
たのである。私はA夫が壊す・崩すではなく構築
からスタートしたところに新しい気持ちを感じ、

(おやおやこれは何が始まるのだろう、ここは大
事にしたい)、と思ったのである。

作り始め

何が始まるのかと思いつつ手伝っていると、A
夫の「かしわもち作ってんだ」の声。小さく切つ
た段ボール紙にクレヨンで色を塗っていた。やつ
と何をしようとしているのかが見えてきた。これ
までこのような伝える言葉はなかなか聞かれな
かった。私は「かしわもちらしくしたいと思い、
緑色の紙を持ってきて「葉っぱを作ってあげる
ね」と言うと、A夫の「いいよ」の返事。作った
葉っぱでくるみ始め、すんなり受け入れたことに
ホッとした。

B夫も一枚一枚丁寧に葉っぱ作りに取り掛かっ
ている。かしわもちがどんどん出来上がるので、
葉っぱ作りが間に合わなくなってきた。

C子の参加

保育室で一人で絵を描いていたC子に「かしわ
もちの葉っぱ作りが忙しくて大変なの。手伝って
くれる？」と声をかけた。C子は「いいよ」とす
ぐに来てくれた。

C子は進級児。以前から友達の様子を見ていた
り、得意な絵を描いたり製作をしていることが多
かった。自分から友達の遊びに入ろうとしたり、
声をかけたりはしないが、誘われればすんなり
入ってくる。年少組の後半には園庭を走り回って
笑顔で汗を流すこともあったが、環境が変わり、
また表情が硬くなつてむっつりしがちだった。そ
のようなC子が遊びの中で自然に友達とかかわれ
るといいなと思い、声をかけたのである。もとも
と作るのは得意で大好き。私が作っているのを見
て同じように作り始める。かしわもちの葉っぱ

と聞いただけでC子は何をするのかはわかったのだろう。手先も器用なので本物っぽい葉っぱを作ってくれ、かしわもちが引き立ってきた。C子は真剣な表情で作っていた。

お店だった

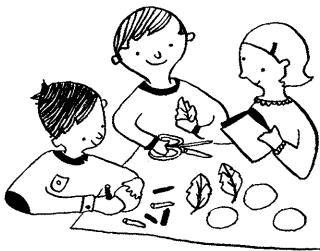
A夫が空き箱のふたを持ってきて「かしわもちやさんって書いて」と言う。それを聞いて（おみせやさんだったのか）と、だんだんA夫のイメージがわかってきた。書きながら、このようなかかわりは少なかったなと反省しつつ、お店ならもっといろいろの人が参加しやすいなと頭の中に思いが駆け巡った。

まず、お店らしくしてあげようと思い、台になればと机を出し、いすの上にある葉っぱでくるんだかしわもちを並べた。ところが、A夫は「いいの」と、もとのいすの上に戻し、小さな箱に詰め

てしまった。私は「あ、そうなのね」とすぐ机を引き下げ、こちらのイメージが先行してしまったと反省。A夫はいすを並べたり看板を作ったりと場づくり中心、B夫は葉っぱ作りと、それぞれに夢中。

お客さんが来て買ったり見たりしてくれると楽しくなると思い、すぐ近くの保健室にいる子どもたちに「かしわもちやさんやっていますよ」と声をかけると、何人が来てくれた。

実は、先週子ども日の集いがあり、みんなで



一緒にかしわもちを食べていたのである。「かしわもち」と聞いただけで子どもたちの反応は早かった。作っている様子をジーツと見ていたD子もいつの間にか作っている。D子は新しいことや初めてのことに慎重で、まず抵抗を示し、納得してから取り掛かる。このころやっと母親と離れるようになっていた。

大繁盛

私も楽しくなってきた。より本物らしくなればと、おもちの材料として白くてふわふわのパッキング材を持ってきた。段ボール紙から丸みのあるかわいいおもちとなり、ますます作り手が増えてきた。

E夫とF夫もやってきて量産。この二人はいつも一緒に園庭に飛び出して外を駆け回っている。勢いのある二人の「いらっしやい、いらっしや

い」のかけ声でこの場が楽しい雰囲気になってきた。その雰囲気を引き寄せられてか、母親とかなか離れられずにいた隣のクラスのG子・H子も、担任と一緒に参加。手を動かしているうちに「それ、大きすぎるんじゃないの」など意見する余裕もでてきた。

このようにいろいろな人がかかわってきても、A夫もB夫も受け入れていた。場を廊下にしたこと、お店にしたことに二人の心持ち、閉じていた気持ちが開いてきたことが感じられた。

隣のクラスの保育者もお店の一員となり、袋作りを提案してくれる。新たな仕事加わり、みんなやる気がでてきた。手を動かすことは人を夢中にさせてくれる。袋が登場したことで、売り買いがおもしろくなってきた。五個入り、十個入りとまとめ買いのお客さんも来てくれて大繁盛。作ることに専念するメンバー。店番に徹するメンバーと

それぞれに張り切っていた。葉っぱ作りに集中していたC子も、この状況を感じたのか「もっと作らないと……」とつぶやいていた。周りにいる友達と直接の言葉のやりとりはないけれど、C子は、かしわもちやさんに得意分野を見出し、自分のペースで取り組むことができた。自分の居場所がしっかりあることを実感し、みんなと一緒にやった楽しさを味わえる時間になったであろう。

かしわもちやさんは、いろいろな思いの子どもたちにとって意味のある場になった。ゼロからスタートして、イメージをもちながら設営するA夫、葉っぱ作りという目的に向かって集中するB夫、こだわりながら自分の腕前を發揮したC子、こんなこともできると新たな楽しさを知ったD子、雰囲気づくりに貢献したE夫とF夫、先生に支えられながらみんなと過ごすことが楽しくなったG子

とH子、お客さんになっていっぱい買ってくれたみんな、それぞれの参加の仕方、かわり方が可能だった「かしわもちやさん」。いつのまにか新しい出会いがありかわりが生まれていた。それをつないでいたのは「かしわもち」だった。また、保育者も一緒になってつないでいくことの重さを改めて感じた。

このときはたまたま「かしわもちやさん」だったが、みんなとごちゃごちゃワワーする中で、子どもたち一人ひとりが「わたしもやったよ」「ぼくもいたよ」「やってみたらおもしろかった」などなど、自分を感じられたことがとても大事なことになるだろう。このような体験を積み重ね、クラスに、幼稚園に、新しい環境に、地にしっかりと足をつけて世界を広げていくのであろう。

この場をつくってくれた、A夫、B夫に感謝。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)